

ロンロンロンは 山のうた

高井省司

絵 水沢 研



ロンロンロンは 山のうた

高井省司 作
水沢 研 絵



講談社

913

高井省司

ロンロンロンは山のうた

講談社 1973

224p 22cm

(児童文学創作シリーズ)

たかい しょうじ かい

ロンロンロンは山のうた

昭和48年10月20日第1刷

昭和49年 第2刷 (F)

著者 高井省司

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京3930

製版 株式会社 まゆら美研

印刷所 株式会社 東京印書館

双美印刷株式会社

製本所 有限会社 文信社

© 高井省司 1973 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

定価は箱に表示してあります。

(児1)



みなさんは、かじかつて
知っていますか？ それはそ
れは、とってもきれいななき
声こゑをしているんですよ。
山やまと川かわと田たんぼにかこまれ
た小さな学校がっこう……。川では、
かじかがロンロンとな
っています。それが、このもの
がたりのぶたいです。



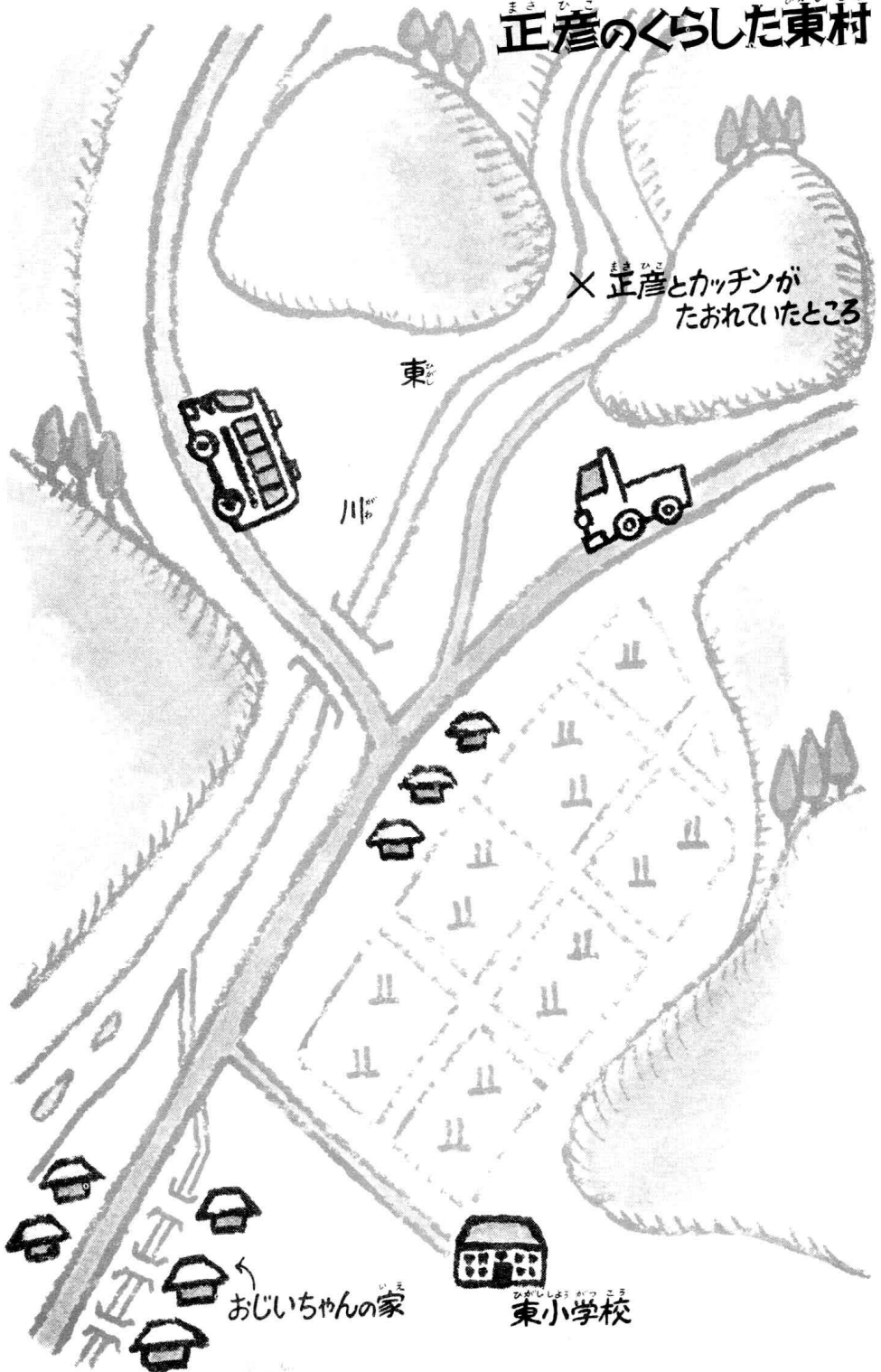
9	ロンロンロンをさがしに……………98
8	ねこふんじやったで、ドボン……………80
7	うそつきなんて、だいきらいだ……………66
6	小さなアイドル……………55
5	カヨちゃんとカッチン……………41
4	小さな学校、大きな先生……………35
3	ロンロンロンのゆめ……………23
2	いなかの家……………15
1	夜汽車にのって……………6



18	17	16	15	14	13	12	11	10
あとがき……………222	ロンロンロンのうた……………204	すばらしかった劇……………188	かぐやひめのおじいさん……………175	はとのたまご……………164	校長先生の手紙……………139	なかなか…たかえる……………134	あつ、あそこだ……………126	ふたりをさがしに……………113

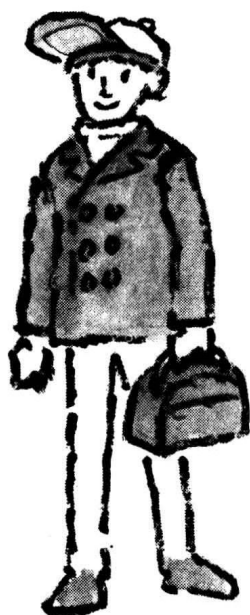


まさひこ 正彦のくらしした東村 ひがしむら



ロ
ン
ロ
ン
ロ
ン
は
山
の
う
た

1 夜汽車よぎしやにのって



「どうした、おかあさん。くるしいか？」

おとうさんの声こゑで、ざせきによこになってねていた正彦まさひこは、ふと目めをさ
ましました。

それから、あたりをふしぎそうに見みまわしました。

——あ、そうか。ここは汽車きしやの中なかだっけ……。

そう気きがついた正彦まさひこは、むかいがわにすわっているおかあさんを、そっ
と見みあげました。

おなかがくるしいのでしょうか、顔かおをゆがめています。



「やっぱり、くるしいんだろ。しゃしよ
うさんに話^{はな}してこようか。」

おとうさんが、しんぱいそうにのぞ
きこみました。

「ううん、いいの。ちよつとつかれた
のよ。じきなおりますわ。」

おかあさんが、目^めをつむったままで
いました。

正彦^{まさひこ}は、おきようかな……と思^{おも}った
けれども、なんだかこわいような気^きが
したので、そのままねていることにし
ました。すると、おとといのことが頭^{あたま}

にうかんできました。

まえまえから、

「なんだか、おなかのぐあいがへんだわ。」

といっていたおかあさんが、病院^{びょういん}にいった三月^{がつ}二十七日^{にち}のことです。

おなかのレントゲンしゃしんをとってもらったおかあさんは、

「はやくしゅじゅつをしてしまうことです。すぐ入院^{にゅういん}しなさい。」

といわれたので、びっくりしてしまいました。

その夜^{よる}、おとうさんとおかあさんは、おそくまで話^{はな}しあっていました。

「ね、おとうさん。」

「ん？」

「もしも……もしもですよ。わたしが、おとうさんと正彦^{まさひこ}をのこして、死^し

ぬようなことになったら。」

「なにをばかなこというんだ、えんぎでもない。」

おとうさんは、おもわず大きな声を出してしまいました。

「しいつ。正彦まさひこがおきてしまいますわ。」

おかあさんが、口くちをおさえていいました。

ところが、ねむっているはずの正彦まさひこは、ちゃあんときいていたのです。

その日ひは、おとうさんもおかあさんも、なんとなくへんだったのです。

いつも、にぎやかに話はなしながら食べる夕ゆふごはんなのに、その日ひにかぎっ

て、あまり話はなもしません。おとうさんは、むずかしそうな顔かおをしていまし

たし、おかあさんの顔かおは、青白あおしろくて元氣げんきがありませんでした。

ごはんがすむと、おかあさんは、

「正彦まさひこちゃん。きょうは、はやくやすみなさいね。」

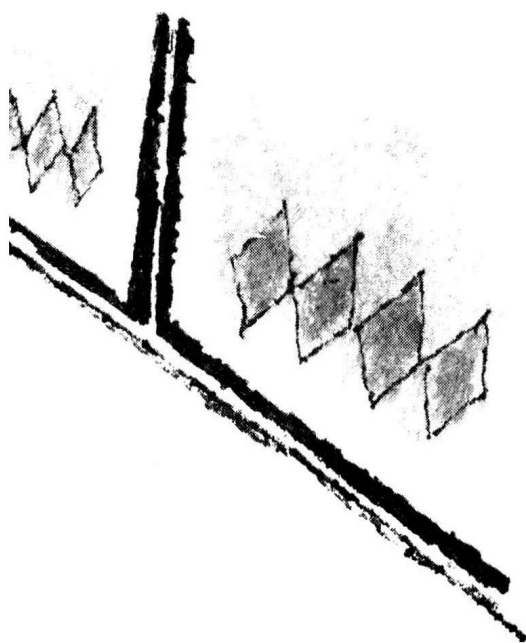
なんていいいます。

正彦^{まさひこ}は、いわれたとおり、ふとんにもぐりこんだのですが、ねむったふりをして、じいっと耳^{みみ}をすましていました。

正彦^{まさひこ}の一家^かは、川崎市^{かわさきし}にある団地^{だんち}にすんでいます。へやは六じょうと四じょう半^{はん}の二つ、それにだいどころがついているだけです。ひろくはありません。

ですから、おとうさんとおかあさんが話^{はな}すひそひそ声^{こえ}は、ふすま一まいへだてて、すぐとなりのへやにねている正彦^{まさひこ}にも、ちやあんときこえていたのです。

正彦^{まさひこ}にわかったのは、



——おかあさんのおなかに、わるいものができて、すぐしゅじゅつしなければならなくなった。ということでした。

——たいへんだぞ、たいへんだぞ。

正彦^{まさひこ}は、そう思いながら、ふとんからはい出る^でようにして、きき耳^{みみ}をたてました。

「わたしが入院^{にゅういん}したあと、おとうさんと正彦^{まさひこ}のせわを、だれにしてみらったらいいかしらねえ、お



とうさん。」

「うん。どうだろう、おかあさん。思いきつて、いなかでしゅじゅつをうけるようにしたら。」

「いなかって。」

「秋田の実家（おとうさんの生まれた家）さ。」

「……………」

「いなかは空気くうきもいいし、きつとなおりもはやい。どうだろう、おかあさん。」

「でも……正彦まさひこやおとうさんは？」

「うん。おれは工場こうばを休やすむわけにはいかないから、ここへのごりとして、正彦まさひこは、いなかのおじいちゃんにあずけようと思おもうんだ。」

「すると、転校てんこうさせるの？」

「ん、まあね。だけど、転校てんこうたって、ほんの二、三か月だけだろ？」

「あまえっ子こでそだった正彦まさひこ……やっていけるのかしらねえ。」

「なあに、おじいちゃんがかわいがってくれるから、しんばいさいさ。」

正彦まさひこは、じぶんがいなかの学校がっこうにいくのだと知しって、びっくりしました。

——なかよしのケンちゃんとわかれて、いなかの学校がっこうへいくなんで、いやだ。

正彦まさひこは、心こころの中なかで、そうさけんでいました。

しかし、病気びょうきのおかあさんのことを考かんえると、こまってしまふのでした。

そして……。

おとうさん、おかあさん、それに正彦まさひこの三人にんは、転校てんこうしていく小学校しょうがっこうの四月がつ一日いつの始業式しぎようしきにまにあうようにと、いそいで二十八日にちの夜行列車やこうれつしやにのっ

たのです。

まさひこ
正彦たちをのせた急行列車は、
きゆうこうれつしゃ
夜のやみの中を、
よる
なか
北へ北へと走りつづけ
きた
きた
はし
ました。

